Ａ．聖書解釈と政治思想
オリエンテーション
導入：脳神経科学とキリスト教
１．聖書の政治思想とキリスト教社会主義
２．現代政治思想とキリスト教
Exkurs
現代キリスト教思想とユダヤ的なもの
キリスト教と科学技術　7/22

＜前回＞
２．現代政治思想とキリスト教
（１）主権の論理構造――シュミットの場合――
１．「言論と欲望」の弁証法を主権論へと展開する　→　政治と宗教との関わり
　　シュミットから出発し、アガンベンを経て、ティリッヒへ。
２．シュミット『政治的なものの概念』『政治神学』
３．政治（友・敵の敵対構造）にとって主権（決定的事態における決定遂行の権限）は論理的に不可避的である。主権：「人間の物理的生命を支配する」権力であり、それは、「刑の判決の形で、人間の生死を意のままにする権限、すなわち生殺与奪の権」を含む。
４．法秩序の内部にありながら、法秩序を超える。＝例外
５．主権国家論から、多元的国家論や世界国家論を否定。
（２）主権の論理構造――アガンベンの場合――
４．シュミットの主権論あるいは「原初的な政治的構造」（アガンベン、1995、107）。
　　シュミットの主権論　→　逆説と例外という論理構造
５．「主権の逆説は次のように言い表される。『主権者は、法的秩序の外と内に同時にある』。主権者は事実、例外状況を布告し、それによって秩序の効力を宙吊りにするという権力を法的秩序によって認められている者である。だとすれば、主権者は『法的秩序の外にありながら、法的秩序に所属している。というのは、憲法が全面的に宙吊りにされうるかどうかの決定は彼に任されているからである』。『同時に』という正確を期した表現は、ありきたりのものではない。主権者は、法の効力を宙吊りにする合法的な権力をもつことによって、合法的に、法の外に身を置く。」（同、25）
６．主権の論理構造：「法的秩序の外と内」の「同時」の逆説性。
しかし、法という意味システムを根拠付けるものは何か？
７．暴力や欲望との連関。
「主権者とは、暴力と法権利のあいだが不分明になる点であり、暴力が法権利へ、法権利が暴力へと移行する境界線だ、ということである。」（同、50）
８．「ホモ・サケル」（Homo Sacer）。古代ローマの文献（ポンペイウス・フェストゥス『言葉の意味について』）に登場する「聖なる人間（ホモ・サケル）」という謎めいた形象――「誰もが処罰されずに殺害することができたが、彼を儀礼によって認められる形で殺害してはならなかった」――から、政治と宗教の関係性の原初形態へ。
10. 「聖化は二重の例外化をなしている。それは人間の法からの例外化であるともに神の法からの例外化であり、宗教的領域からの例外化であるとともに世俗的領域からの例外化でもある」（同、118）、「ホモ・サケルは、犠牲化不可能性という形で神に属し、殺害可能性という形で共同体に包含される。犠牲化不可能であるにもかかわらず殺害可能である生、それが聖なる生である。」（同、119）
11. 主権とホモ・サケル（例外における同型性）。

「一方の極にある主権者とは、彼に対してはすべての人間が潜勢的にはホモ・サケルであるような者であり、他方の極にあるホモ・サケルは、彼に対してはすべての人間が主権者として振る舞うような者である。その意味で、主権者とホモ・サケルは、同一の構造をもち互いに相関関係にある正反対の二つの形象を提示するものである。」（同、122）

12.「原初的な政治的構造」から、近代へ。

「生そのものが先例のない暴力へと露出されている」（同、160）、「我々が皆、潜在的にはホモ・サケルであるからかもしれない」（同、162）。

強制収容所、全体主義、人間モルモット、安楽死、脳死（死の政治化）などの一連の問題。

13.「剥き出しの生の空間（つまり強制収容所）へと政治が根源的に変容し」、「政治がかつてないほど全体主義的なものとして構成されえたのは、現代にあっては政治が生政治へと全面的に変容してしまっているからにほかならない。」（同、166）

das bloße Leben(ベンヤミン) → la nuda vita

14.「ホッブズのいう自然状態は、都市の法権利とまったく関係のない、法に先　行する条件なのではなく、法権利を構成し法権利に住みついている例外であり境界線で　ある。自然状態は、万人の万人に対する戦いであるというより、正確に言えば、誰もが　他の者に対して剥き出しの生でありホモ・サケルであるという状況のことなのである」　（同、151）

15. 近代：もともとは法的政治的な共同体秩序の欄外＝余白に位置していた「剥き出しの生」の空間が政治空間と一致するようになる。排除と包含、外部と内部、ビオスとゾーエー、法権利と事実のあいだの区別が定かでなくなる不分明地帯への突入。

（３）意味世界と意味根拠

18. 例外・主権の論理構造における宗教論

文化＝意味世界（合理性としての道徳はこの内部に位置する　cf. 政治）

→　意味形式：意味は意味世界内部での関係性である。

19. 意味世界（意味形式）はいかにして根拠づけられるか？　意味根拠とは何か？

意味世界は意味世界においては根拠づけられない。→パラドックス

意味形式に対する意味内実。

20. 意味内実：意味の根底にして深淵（ティリッヒ）

↓

意味内実は、意味世界内部の素材を象徴として使用することによって示される。

本来、啓示・神秘とはこうした事態を意味していた。

例外・主権とはこれに対応する。　→　宗教と政治の照応関係。

意味世界を宙づりにしつつ意味世界を制定する。

ニカイア公会議をコンスタンティヌス大帝が招集したことの意味。

ジョルジョ・アガンベン『王国と栄光――オイコノミアと統治の神学的系譜学のために』青土社、2010 年。

21. 意味内実は意味世界の歴史性を表現する。

22. 宇宙論的な神の存在論証とは、意味世界の根拠付けの問題を扱っている。

第一原因とは、象徴あるいは隠喩である。

２．現代政治思想とキリスト教

２―４：ジジェクとパウロ

（１）スラヴォイ・ジジェク『脆弱なる絶対――キリスト教の遺産と資本主義の超克』

０．誰のためでもなく、何のためでもなく

・「ポストモダン時代とその「思想」とやらにみられるもっとも悲惨な状況のひとつは、宗教的な要素が様々な衣をまとって回帰していることである」
「原理主義」「〈ニューエイジ〉的精神主義から脱構築主義そのもの」(7)
（宗教回帰は、1960 年代の世俗化論の予言がはずれたという点で、宗教学ではしばしば話題になるが、世俗主義の変容としてのスピリチュアリティこそ、真性の宗教（キリスト教？）が戦うべき相手なのかもしれない。では、どうするのか。）
↓
・ラカン派マルクス主義者ジジェクの提案。
「戦略を逆転すること」「キリスト教とマルクス主義のあいだには直接的な系統関係があるのだ。そう、キリスト教とマルクス主義は新種の精神主義の襲撃に対して一致協力して戦うべきなのだ」、「聖パウロ」(8)、「聖パウロを離れてキリストは存在しない」(9)
（20 世紀前半の宗教社会主義論の再評価・再生は可能か？
イエスではなく、パウロ、これがポイントである。現代のパウロ政治神学への注目は、重要な研究テーマである。）

１１．寛容の原理

・「「例外が［普遍的な］規則に基礎を与える」」(164)
・「真に弁証法的な問題は、連鎖と例外が直接的に一致することである」、「例外的な形象の連鎖」(165)
（「例外」の問題。シュミット、アガンベン、ジジェク・・・。啓蒙的近代の「普遍―特殊」とは、別の　概念構築の試み。その意味では、ポストモダン。キリスト教の普遍性とは？）

１２．キリストによる束縛の解除

・「キリストが（彼に先行するブッダのように）」「社会階層の停止を強調するため」、「この新しいコミュニティーは明らかに除け者たちの集団として、既存の「有機的な」グループとは正反対のものとして構成されている」、「「異常な」除け者コミュニティ」「の系譜」(175)
・「集団形成の二つの例」「〈教会〉と〈軍隊〉」、「根本的なパラドクスは、経験的な制度に関していえば、二つのコミュニティーはしばしば入れ替えられる、ということである」(176)
・「〈教会〉と、社会制度内の〈教会〉の権威を脅かす対抗-コミュニティーとして台頭した修道院」、「〈教会〉のあったところに、〈軍隊〉が生じなければならない」(177)
・「均衡状態を回復するための円環の論理を停止すること」「社会のヒエラルキーは逆立ちしている」、「精神分析でいう倒錯への誘惑を避けること」「そんなことになれば」「単にその上下を入れ替えて逆立ちさせただけであり」「いぜんとしてそれに寄生することになる」、「愛は社会のヒエラルキーの偉大なる粉砕者ではないのか」(178)
（単なる逆立ちという解放運動の問題点。解放の神学、特にフェミニズムの落とし穴）
・「「愛において、そして愛という動機から、愛する者を憎め」」、「私は、かけがえのない人間として彼を愛するがゆえに、社会的-象徴的構造に取り込まれた彼の側面を「憎悪」するのである」(179)、「「社会的役割」やイデオロギー的な機能や仮面の下に隠れている「現実の人間」をみるべきである、というありふれた「ヒューマニズム的な」思想とはいっさい関係ない」「聖パウロは、断固たる「理論的反-ヒューマニズム」の持ち主である」、「「だれをも人間的な見方によって知ることはすまい」」(180)
（ここは肝心ではあるが、難しい。）

・「「束縛の解除」は「象徴的な死」をともなっている」「法に対して死ぬ」(180)、「新たにゼロから出発する身振り」「「束縛の解除」のなかには、おそろしい暴力が存在している」「徹底的な「過去の清算」という暴力」

（これはユダヤ教の起源にあるあの暴力とは違うのか。この暴力はトラウマにならないのか。）

・「真に信じる者は仮象を、ひとつの仮象を通じて輝き出す神秘的な次元を、信ずる」、「彼は他者のなかに、他者本人すら気づいていない〈善良さ〉を見出す。ここでは、仮象は現実にはもはや対立していない」(181)

・「〈絶対的なもの〉は脆弱ではかないものである」、「そうした奇跡的な、しかし同時にきわめて脆弱な瞬間において、われわれの現実にはまったく別種の次元が生ずるのである」(182)

（たしかに。しかし、なおも絶対とは？）

・「理想化と崇高化との差異」「誤った崇拝は理想化をうむ。それは他者の弱さを見えなくする」、「あるいは」「自己のいだく幻想を投影するスクリーンとして他者を利用し、他者そのものを見えなくする。一方、真の愛は、愛する者をありのままに受け入れる」、「愛とは活動のことである」(182)

（波多野とジジェクの近さ）

（２）スラヴォイ・ジジェク『操り人形と小人――キリスト教の倒錯的な核』

０．序――神学という名の操り人形

・「神学的な次元は、脱構築による、「世俗化以降の」メシア的転回という意匠のもとで息を吹き返している」、「ベンヤミン」「『神学』と呼ばれた操り人形」

・「宗教が、もはや特定の文化的生活形態に完全に組み込まれたり、それと同一化したりするのではなく、自律性を獲得し、その結果、様々な文化にまたがる同じひとつの宗教として生き残ることができるような体制――これは、近代のありうべき定義のひとつである。宗教は、このように蒸留されることによって、みずからをグローバル化できるようになる」(8)

・「そうなるためには犠牲も必要」「宗教は、社会全体をまとめるという世俗的な機能の面においては、補助的な付随現象に格下げされる」「宗教が担う役割には二つある。治療的役割と批判的役割である」(9)

・「『信仰と知』」「宗教の三様態」「「民衆の宗教」」「「実定的な宗教」」「「〈理性〉の宗教」」(10)

・「問題は、近代という〈理性〉の時代において、宗教は社会を有機的にまとめるというこの機能をもはや果たすことができない、ということである。今日、宗教がこの力を失い、もはやそれを取り戻すことができないのは、科学者や哲学者のせいだけではない。「普通の」人々という大きな集団のせいでもある」(11)

・「宗教的な問題に関して第一に銘記すべきことは、「深遠な精神性」への言及がふたたび流行していることである」(12)

・「キリスト教の転覆的な力を秘めた核は」「唯物論的アプローチによってしか理解できない」、「真の弁証法的唯物論者になるためには、キリスト教的な経験を経るべきなのだ」(13)

・「人々が率直に「本当に信じた」時代は、歴史上、存在しただろうか」、「主観的にみて完全に真実であると思うこと」「に対する率直な信仰は」(13)「近代的な現象である。前

近代の社会は、率直に信じたのではなく、距離をとって信じていた」(14)
・「われわれは今日、もはや「本当の信仰心」をもっていない。われわれはただ、自分の属する共同体の「生活様式」に対する敬意の一環として（いくつかの）宗教的儀礼や慣習に従っている」、「「わたしは実際にはそれを信じていない。それはわたしの文化の一部なのだ」」、「われわれの時代の特徴である」(15)
「今日、われわれは結局、みずからの文化をそのままじかに生きているひとたち、文化に対する距離を欠いたひとたちを、文化にとっての脅威と感じている」(15)
・「昨今の漠然とした精神主義」(16)、「キリスト教のグノーシス主義的異端と同質のもの」(17)
・「聖パウロの使徒書簡」「人間としてのイエス」に「対して、まったく、おどろくほど無関心であることがわかる」、「イエスの死と復活という事実を確認したあと、パウロは、彼の本分であるレーニン的な仕事、すなわち、キリスト教共同体と呼ばれる新しい党を組織する仕事に向かう」、「レーニン主義者としてのパウロ」(18)
・「パウロは、ユダヤ的伝統の内部から読まれるべきである」「彼の切断が本来もっている急進性を、彼がユダヤ的伝統をいかに内部から掘り崩したかということを」、「われわれは「生成過程にあるキリスト教」を捉えることができる」(19)

１　東洋が西洋に出会うとき

・「シェリングの問い」「〈神〉の人間化、永遠性からわれわれの現実というかりそめの世界への神の降下」は「〈神〉自身の視点からみれば上昇なのだとしたら？」「〈神〉が十全な現実化を得るための」(22)
・「真の愛とは、まさしく、約束された〈永遠性〉を不完全な個人のために捨てるという、それとは反対の動き」「愛のために永遠の存在を放棄する身振り」
・「永遠性が究極の牢獄、息の詰まるような閉域であり、時間への転落だけが人間の経験に〈開け〉を導入するのだとしたら」「「顕現」という〈出来事〉」(23)
・「〈神〉が〈神〉のもとから捨て去られたことを告白するその叫びの瞬間」、「〈神〉が一瞬であれ無神論者に見える宗教」、「キリスト教は、おそろしいまでに革命的になる」「〈神〉が単に全能であるだけでは完全ではないと感じた宗教は、地上に宗教多しといえどもキリスト教においてほかない」(25)
「普遍的概念」は「死を通じて特異な単独者、「イエス・キリスト」として現れた。ここでは、普遍性が単独性に止揚されるのであって、その逆ではない。」(29)

３　〈現実的なもの〉という逸脱

・「ジャック・ランシエール」「古代ギリシアの市民たち（社会のヒエラルキー構造のなかで明確な居場所をもたない者たち）」「支配権をにぎる少数の独裁政治家や貴族」「社会組織のなかに固定された場所をもたない、排除された者である彼らは、みずからを〈社会全体〉の、真の〈普遍性〉の代理人、代表として提示したのである」、「部分ならぬ部分」(98)、「政治とは本来、つねに、〈普遍〉と〈特殊〉とのある種の短絡を含んでいる。つまり、それは、「普遍的かつ単独的なもの」というパラドクス」、「非-部分と〈全体〉とのこの同一性」、「あらゆる偉大な民主主義的出来事のなかに認められる」(99)
・「キリスト教的な同一化のかたち」「それは、最終的には失敗との同一化なのである」「同一化の対象は〈神〉なのだから、ここでは、〈神〉自身が失敗することがしめされねばならない、と」、「われわれは、みずからの失敗において、まさに神の失敗と同一化する」(135)
・「このカーニヴァル的な転倒を、「わたしが弱いのは、〈神〉の力を見やすくするためである」といった言葉と同列に理解してはならない。この転倒がいっているのは、ばかにさ

れ、笑いものにされたわたし、自分の弱さをさらし、嘲笑の的になったわたしは、同じくばかにされ、笑いものにされたキリスト――威厳や尊厳をすっかり奪われた、究極の聖なる〈愚か者〉キリスト――と同一化する、ということなのだ。パウロの考えでは、偽使徒たちは強者であり、自分たちのことをえらいと考えている」(137)　２コリント 11.1-6
・「われわれが〈神〉と同一であるのは、あくまで、〈神〉が〈神〉自身と同一ではなく、自己とを放棄したとき、つまり、〈神〉とわれわれとを隔てる根源的な距離が、〈神〉そのものに「内在化」されたときである。〈神〉からの分離という根源的経験は、まさに〈神〉とわれわれをひとつにする要素なのだ。ただし、そういえるのは、われわれはそうした経験を通じてはじめて、〈神〉の根源的な〈他者性〉と正面から向き合うことになる、というありふれた神秘主義的な意味においてではない。屈辱と苦痛は、唯一の超越論的な感情であるというカントの主張と同じ意味においてである。わたしは神の至福と同一化できるという考えは、ばかげている。わたしは、〈神〉からの分離という無限の痛みを経験してはじめて、〈神〉自身（〈磔〉になったキリスト）と経験を共有することができるのだ」(138)

４　法から愛へ……そしてまた法へ
・「〈残余〉とは、類そのものを具現している過剰な要素以外の何ものでもない」、「メシア的次元は」「ゆるぎない中立的な普遍性ではなく、それぞれの特殊な要素がかかえこむ自己分裂である」、「ラクラウとランシエールが論じているように、本来的な意味での民主主義の主体は、「残余」である」、「それ自身に固有の、特定の場所を占めることができないこうした主体は、普遍性そのものを具現している。根源的な政治的普遍性」「と、例外に基礎づけられた普遍性（たとえば、暗黙のうちにある特定の特権化し、他の集団を排除する「普遍的人権」)」「を対置したとき」「ポイントは、根源的普遍性を作動させる単独的な要因は、〈残余〉そのものである、すなわち、例外に基礎づけられた「公式の」普遍性のなかに固有の場所をもたないものである、ということだ」(164)、「排除されたものたち」、「パウロ的普遍性は、特殊な内容を容れる空虚で中立的な容器としての沈黙した普遍性ではなく、「戦う普遍性」、特殊の内容全体を貫通する根源的な分割というかたちとなって現れる普遍性である」(165)

５　差し引くこと――ユダヤ教的に、キリスト教的に
・「ヨブの苦難の（無）意味という問題」「人類史におけるイデオロギー批判の最初の例」、「なんらかの意味があるはずだという観念を一貫して拒否」、「キリストの苦難もまた無意味なのであって、有意味な交換の行為ではないのである」、「キリストの場合、苦難する絶望した人間（ヨブ）と〈神〉とを分かつギャップは、〈神〉自身の根源的な分裂として、あるいはむしろ自暴自棄の行為として、〈神〉自身のなかに置き換えられるのだ」(188)
・「全能の気まぐれな〈神-父〉に対する不満ではなく、〈神〉の無力さを暗示する不満である」「父親の強さを信じていた子供が、父親には子供を助ける力がないということを恐れとともに発見したときの状態に似ている」、「みずからの無力さをさらけ出しながら実際に死ぬのは、そしてその直後に〈聖霊〉のかたちをとって死からよみがえるのは、〈神-父〉なのである」(189)
・「沈黙の身振りをとるなかで、神の無力さに気づいた」、「〈神〉は正当でも不当でもない、ただ無力なのである。ヨブが突然理解したのは、ヨブの苦難において実際に試練を受けているのは彼ではなく、〈神〉自身であるということ、そして〈神〉がこの試練に無残にも負けた、ということである」

（３）スラヴォイ・ジジェク『ラカンはこう読め！』

〈大文字の他者〉
人間存在の現実：
　象徴界：チェスで従わなければ規則。駒はどういう動きができるかで定義できる。
　想像界：駒のもつ名前にふさわしい形と性格付け
　現実界：ゲームの進行を左右する一連の偶然的で複雑な状況（プレイヤーの知力、予想外の妨害）
　〈大文字の他者〉は象徴的次元（規則の複雑なネットワークや前提、私が自分自身を測る物差し）で機能する。
　　発話行為を支える文法規則（無意識、しかし反省を通して部分的に意識できる）／私に取り憑いていて私が知らないうちに従っている規則（無意識的な禁止）／規則と意味を知っているが知っていることを他人に知られてはいけない（然るべき態度を保つために汚い卑猥なあてこすりを黙って無視する）
　　↓
　　「神」、「大義」（自由、共産主義、民族）。わたしが誰かと話しているときにそこには常に〈大文字の他者〉がいなければならない。個人の存在全体の基盤であり、究極の意味の地平を供給する評価基準。仮想的な性格（象徴的秩序は個人から独立に存在するのではなく、個人の持続的な活動によって支えられている）。
　物を贈るときに、その使用価値は不問に付され、贈り物が私の愛の象徴になり得る。還元不能の再帰性。コミュニケーション行為は同時にコミュニケーションの事実を象徴化している。人間の発話行為は単にメッセージを伝えるだけでなく、コミュニケーションしている主体間の根本的・象徴的交換を自己再帰的に確認している（ヤコブソン）
　拒絶されるためだけになされる身ぶり、むなしい身ぶりによって社会的な絆がしっかり結ばれる。象徴的相互作用の宣言的次元、言表された内容と言表行為との間の還元不可能な落差。

プロテスタントの予定説、知っていると想定される主体
伝統への回帰とは伝統を発明することである。回帰そのものが回帰すべき対象を形作っている（イエスに返れ！）。民族復興（民族集団が国民国家を建設するとき、古代の忘れられた民族的ルーツへの回帰として定式化する）
「本気で信じている」他人を見つけたいという欲求
信仰を待たないユダヤ人が「伝統に敬意を表するため」にユダヤの伝統的料理規則に従う。
　「本気で信じていない。たんに私は文化の一部なのだ」というのが、我々の時代の特賞である。「文化」とは、我々が本気で信じず、真剣に考えずに実践していることすべてを指す名称。「できるふりをしろ。できるようになるまで」（現代の「断酒会」）
　象徴的虚構の効果、虚構がわれわれの現実を構造化しているということ。
　平等としての正義は羨望にもとづいている（ニーチェ、フロイト）。正義への要求は、究極的には、過剰に楽しんでいる人々を抑制し、誰もが平等に楽しめるようにしろという要求である。この要求の必然的帰結は、禁欲である。
　知っていると想定される他者に期待するのは「私は誰か、私は、本当に何を欲しているのか」というものに対する最終的な回答である。分析家はこの罠にはまってはならない。

　人間の欲望が「外に出された」〈大文字の他者〉、すなわち象徴的秩序によって構造化されていること。私の欲望が社会的規範に背く侵犯的ものだとしても、その侵犯自体が侵犯の対象に依存している。
　パウロのローマ書7.7以下。律法がそれに背きたいという欲望をいかに生むか。

大切は人間の権利はその核心においては単に法を破る権利だということ。

「幸福を追求し、私有財産をもつ権利」＝盗む（他人を搾取する）権利

「出版と意見表明易の自由」＝嘘をつく自由

「宗教的信仰の自由」＝偽りの神を崇拝する権利

（自由主義的自由とは、他者に迷惑をかけない限りにおいて愚かであり得る自由）

他の人間の底知れぬ次元：私は自分が本当は何を欲望しているのかを知らないという事実、私自身の欲望の謎を、私に突きつける。

隣人は謎に満ちた存在である。隣人の欲望。あたらの内にある、あなたでは統御できない何物か。隣人の怪物性（非人間的な物）。愛の告白が持つ凶暴な性質

掟は、隣人を適当な距離に遠ざけ、すぐに隣に住む怪物に対して身を守らせることである。

（波多野精一：自然的人間の間の緩衝地帯としての文化）

法と義務を伴う象徴的秩序の主な機能は、われわれと他者との共存を多少なりとも耐えられるようにすること。われわれの間の関係が爆発して殺人を犯さないためには、第三者が私と隣人との間に割って入る必要がある。

他者の恐ろしい奈落、理性の光（啓蒙・カント）に対する世界の夜（ドイツ観念論）

幻想：われわれの生の現実界にじかに圧倒されないように我々を守っている遮蔽膜、現実そのものが現実界との遭遇からの逃避として機能している

超自我：享楽はたんなる快楽ではなく、快感よりもむしろ痛みをもたらす暴力的な闖入

フロイト（→ラカン）：主体を倫理的行動に駆り立てる媒体

理想自我：主体の思想化されたイメージ、想像界的、自我の理想化された鏡像

自我理想：私を監視し私に最大限の努力をさせる〈大文字の他者〉、わたしが憧れ現実化したいと願う理想、象徴界的

超自我：現実界的で、無理な要求を私に突きつけ、なんとかその要求に応えようとする私の無様な姿を嘲笑する、道徳意識には関係ない、反倫理的な審級

現代の無神論者は、自分は神が死んだことを知っていると思っている。かれらが知らないのは、自分が無意識のうちに今なお神を信じているということだ。主体は寛容な快楽主義者を自称し、幸福を追求しているが、その無意識には禁止がたくさん詰まっている。

「もし神が存在しなければ、そのときはすべてが禁じられる」

「もし神が存在すれば、そのときはすべてが許される」、宗教の原理主義者の立場

抑圧的な権威の没落は、自由をもたらすどころか、より厳格な禁止をあたらい生む、という逆説。自由選択という見せかけの下に潜んでいるのは、伝統的・権威主義的な父親の要求よりもずっと抑圧的な要求、自発的に自分の意志に基づいて実行しろという暗黙の命令。偽りの自由選択＝卑猥な超自我の命令。内的自由をも奪い、何を欲するべきかを指示する。

楽しめという卑猥な命令としての超自我

異教とグノーシス主義：

物質的現実性の腐敗と不活性を排除した自己というグノーシス主義の夢

記憶と想起の内的な旅、霊的な自己浄化

cf.　ユダヤ教とキリスト教、精神分析：真理の外在性、外的な外傷的遭遇

快楽は奇妙な倫理的義務として機能している。人々に罪悪感を与えるのは、禁断の快楽にふけることによって禁止を破ることではなく、楽しめないでいること。

楽しむのを禁じられているではなく、楽しまなくてならないという圧力

リベラルで懐疑的な冷笑者と原理主義者。どちらも、本来の意味で信じる能力を失っている。彼らに想像も付かないのは、本物の信仰の礎となる根拠なき決断、すなわち一連の推論やポジティブな知識に基づかない決断である。

普遍的人格というのは本質的には純粋な信仰である。それを人間の本質に関するわれわれの知識によって根拠づけることはできない。これはわれわれの決断によって断定された公理なのである。本物の信仰は事実とは無関係であり、無条件の倫理的関与を表現したものである。

リベラルな冷笑者にとっても、宗教的原理主義者にとっても、宗教的声明は、特設的名知をほぼ経験的に述べたものである。信仰をポジティブな知に還元しようとする方向性。

真の危険とは、世俗的な科学的知が脅かされていることではなく、本物の信仰が脅かされていることだ。

＜参考文献＞

１．Jon Simons（ed.）, *From Agamben to Žižek. Contemporary Critical Theorists*, Edinburgh University Press, 2010.

２．Slavoj Žižek, *The Fragile Absolute --- or, why is the christian legacy worth fiting for?*, Verso, 2000.　（スラヴォイ・ジジェク『脆弱なる絶対――キリスト教の遺産と資本主義の超克』中山徹訳、青土社、2001 年。）

, *The Puppet and the Dwarf. The Perverse Core of Chrisitianity*, The MIT Press, 2003.　（スラヴォイ・ジジェク『操り人形と小人――キリスト教の倒錯的な核』中山徹訳、青土社、2004 年。）

３．スラヴォイ・ジジェク『ラカンはこう読め！』紀伊國屋書店

『ポストモダンの共産主義――はじめは悲劇として、二度めは喜劇として』ちくま新書

『ジジェク革命を語る――不可能なことを求めよ』青土社（*How to Read Lacan*, 2006.）

４．Adam Kotsko, *ŽIŽEK and Theology*, T & T Clark, 2008.

５．芦名定道「現代思想と〈神〉の問い――ティリッヒからジジェクまで」、『理想』2012. No.688、40-52頁。